

知ってるようで知らない京都の史実 No.5

琵琶湖疎水工事は何故始まったのか?その1

* 変なきっかけで始まった松ヶ崎浄水場 *

私達が母校へ通学していた頃は、殆どの学生が路面電車（市電）でした。高野で降りていつもの道を卒業するまでに何回往復したでしょうか。その道の直ぐ横にあったのが、琵琶湖疎水に繋がる【松ヶ崎浄水場】です。第2疎水と呼ばれているこの疎水は銀閣寺から哲学の道として有名な道に沿って流れています。高野川の下をくぐって松ヶ崎へきていることさえ、気がついた人はあまり多くないと思われます。

この松ヶ崎浄水場の工事が何時頃、何故始まったのか、それはどのような計画でなされたのか、等は考えることなく、【上水道には浄水場が必要だから在って当然…】と思い込んでいました。だが、この工事は思わぬことがきっかけで始まったのです。明治14年新進気鋭の北垣京都府知事就任と共に始まった《琵琶湖疎水工事》の計画には上水道は勿論それに伴う浄水場計画など微塵も含まれていませんでした。



* 蛤御門の変で京都市街地は焼け野原 *

《蛤御門の変》は、幕末の歴史に出てくる史実ですが京都市中がどの程度の被害を受けたかは、意外と知られていません。当時煮え切らない態度の幕府に痺れを切らし、長州軍勢二千名余が直接天皇の意向をお尋ねしようと、幕府連合軍を蹴散らし蛤御門まで攻め上ったのです。これは、京都にいた薩摩軍の幕府支援でかろうじて禁裏炎上を防ぐという極めて切迫した戦闘でした。



だが京都の市街地は天明の火災に匹敵する大災害で、《東日本大震災後の気仙沼市》と同じような状況でした。御所の南、下京区にあった24,840軒の家屋のうち22,092軒が消失するという大災害だったのです。全体では1350町を焼失、家屋3万7千軒、土蔵1500件焼失とあります。この大火で京都は著しく疲弊して行きます。その上、鳥羽伏見の戦いも被害を拡大させます。

天明の大火は天明8年（1788年）に生じた大火で、そのときの幕府の記録によると焼失家屋3万7千件余とありますから、まさにこれ

に匹敵します。大火から 80 年余、ようやく旧に復したかと思われるときの再度の市街地の
大災害だったのです。

明治新政府が出来ると同時に、遷都問題が急浮上してきたのをご存知でしょうか。大久
保利通を中心に都（ミヤコ）を京都から難波へ移そうという案です。これは明治天皇の東京行
幸で、立ち消えになりましたが、元首となられた【天皇】に諸外国からの儀礼訪問が原因
でした。【首都】が焼け野原状態の京都では《面子》が立たず、しかも復元の目途が立たな
かったからです。江戸に行かれた明治天皇が東京に遷都の決意を固められたのも、市街地
の現状をお考え上での事だったのは明らかです。

これに追い討ちをかけるように《東京遷都》に伴う太政官の移転で、多くの官吏や市民
が東京に転居しました。幕末頃には 35 万あった市民が 24 万に減少した程で、勝海舟らの
斡旋による《江戸無血開城》は、この京都の状況を見据えてのことだったのです。

* 進まぬ復興に痺れを切らした明治政府 *

明治政府は衰退した京都府に対し、明治 3 年 3 月に金 5 万両を、更に復興進まぬ京都に
同年 12 月 5 万両を追加交付しています。明治 2 年に受けた 15 万両の勸業基金と共
に明治 14 年京都府民への交付金の形で上下京連合区会に移管されました。この当時の京
都は三条通りを境に上下の 2 区しかありません。明治初年就任の京都府知事《榎村正直》は京
都復興の政策を色々打ちますが効果があがりませんでした。

産業基金御達書(写真)

制作年 明治3年(1870) 寸法 21.0×102.0cm 所蔵者 京都府立総合資料館

明治政府は、東京遷都後の衰退した京都の実情を考慮して、京都府民に
対し明治3年3月に5万両を交付し、さらに同年12月に5万両が追加された。
当初京都府が管理し、明治2年に受けた15万両の勸業基金とともに、殖
産興業の中核資金として活用されたが、明治14年に本来の京都府民への交
付ということで、上下京連合区会へ移管された。明治21年には増殖により
元利合計39万6970円50銭に達していた。これにより、北垣国道の登場とど
もに琵琶湖疏水工事の資金基盤ができるのである。

塵海

制作年 明治14-30年(1881-1897) 寸法 23.8×16.2cm 所蔵者 京都府立総合資料館

北垣国道の日記である。明治14年10月から始まり同30年9月で閉じられて
いる。茶紙の表紙(一部和紙)に木版の野線用紙に墨で綴られている。日にち
と天候を記し次いで内容を記す。琵琶湖疏水の進捗状況を知る上で貴重な資料
である。



当時の京都は、これといった産業？は西陣織位で、それも購入者の多くが東京に移転し、
需要はがた落ちです。洋服屋が大繁盛し、これまでの西陣物は注文が僅かになったことが
西陣が東京について行けなかった最大の原因と考えられています。和菓子の《とらや》や、
お香の《鳩居堂》はこのとき東京に移転したのです。

まして当時は、現在のような建築のための《融資制度》等全くありません。家を建てよ
うと思えば、全て自己資金を調達してからの話です。しかも当時の金利は年 15%なら極安
といわれる状況です。

痺れを切らした政府は榎村知事を更迭し、赴任してきたのが《北垣国道》です。彼は 45

歳の若さで京都府知事に抜擢された、新進気鋭の行政官吏でした。着任直後に前述の 25 万両を連合区会に移管し、これを以って京都復興の足がかりを作ろうと考えました。その具体策の最大の柱が【琵琶湖疏水着工計画】だったのです。彼は京都赴任前から、この計画を建て、時の政府に進言しこれが認められ知事として赴任してきたのです。

北垣国道が京都府知事に赴任してこなければ、明治時代に琵琶湖疏水は恐らく完成していません。昭和になっても百万都市になれたかどうかも疑問でしょう。それほど京都はこの時点で疲弊し尽くしていたのです。若い北垣は【胆力と人物眼】の極めて優れた持ち主であり、優秀な人材を集める能力に長けていました。且つ、中央政府には彼の手腕を支持出来る多くの中枢を背景にしていたのです。

* 琵琶湖疏水の中心人物 4 名 *

疎水工事は、田邊朔朗という若い技師一人が製作にあたったように思われていますが、とんでもない事です。一番は何といても《北垣国道》、次が《田邊朔朗》ですが、この他に《島田道生》と《南一郎平》という人物が欠かせません。この 3 名を集めたのが北垣でした。この 4 名には共通している事があります。

それは危機に直面したときの、問題解決に対する《すさまじいばかりの集中力》です。この集中力が周りの人々を感動させ、且つ敵をも味方にしてしまう人間的魅力を醸し出す強烈な個性でしょう。《運》や《つき》も彼らの味方になるのです。田邊朔朗とはどんな人だったかを探ると同時に、その当時の社会状況にもメスを入れてみます。



田辺は 1861 年（文久元年）東京生まれで、二歳で父を亡くし、八歳で明治維新という大社会改変に遭遇する艱難辛苦を体験しています。彼の不撓不屈の精神はこの時に養われたのでしょう。明治 10 年 17 歳で東京工部大学（後の東大工学部）に入学します。明治政府は当時外国人教師：技術者を 580 名余り抱えており、彼らの月給は 2000 円という破格の高給者もあり、平均 3~500 円でした。優れた諸外国の技術を学び、日本人教授：技術

者を育てるためとは云え、2 千円は現在の 5 千万という金額になります。因みに、田辺が京都府に赴任したときの初任給は 40 円でした。

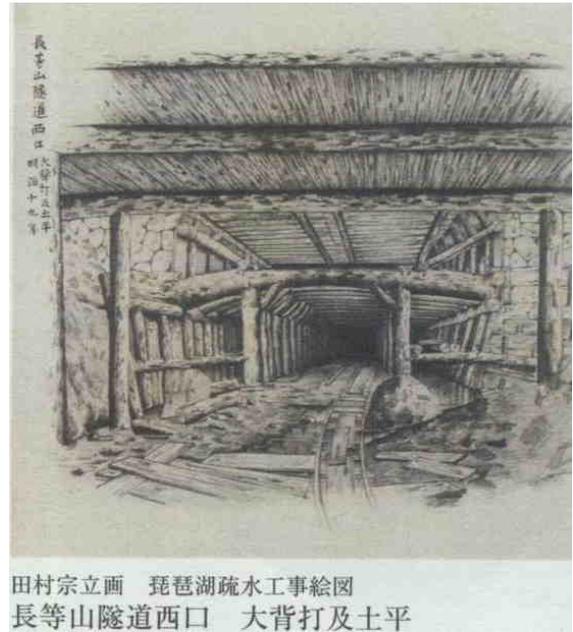
余談ですが本学創始者の《中沢岩太》も田辺と同年の東京工部大学の入学です。田辺は三年生の時、学業成績優秀のため特別一等賞を受けています。同年学術研究のため初めて琵琶湖疏水調査に赴きましたが、受賞はこれが評価されたのです。卒業論文も「琵琶湖疏水工事計画」であり、北垣に招かれて卒業直後に京都府に任官するのも、このときの研究成果が基でした。

島田道生は測量技師です。彼は北海道開拓使時代に御雇外国人技師ライマンから図式と測量技術を学び、同じ御雇外国人技師レ.デイについて北海道全国基本線測量を行う等して技術を高めていました。北垣は京都の前任地高知県で島田と知り合い、彼の測量技術の優秀さをつぶさに熟知しています。北垣が京都着任と同時に島田を高知から呼び寄せ琵琶湖疏水の測量を開始させているのです。逢坂山トンネルの貫通のとき、彼の測量の誤差は僅

か1 cmだった事はあまりにも有名な話です。

南一郎平（いちろべえ）は大分の人で、松方正義が日田県令のとき知遇を得て、彼の父の遺言であった《廣瀬井堰》を明治六年に150年の難工事の末完成させた人物です。

この時以来、松方の信頼が厚く以後中央政府に出仕し、その後の政府の土木事業の殆ど全てに関係しています。琵琶湖疏水の前明治12年、政府は福島県郡山の《安積（アサ）疎水》を着工し、15年10月に完成式を挙げていますが、そのときの工事主任の役割を担っていたのが一郎平でした。最初《猪苗代湖疎水》と呼ばれていたこの完成式には、北垣知事も島田と一緒に招かれて出席しています。北垣は京都府知事赴任前に一郎平を松方から紹介され、彼は政府に提出する《琵琶湖疏水計画書》の予算案を含めた全てを書き上げているのです。



北垣が政府に《琵琶湖疏水計画書》を提出するときの大蔵卿は松方正義、この書類を作成した一郎平は松方の紹介。造り話のようですが、この計画書作成が一郎平でなければ当時の政府中枢の認可が得られなかったという本当の話です。

彼の計画書は安積疎水と同じ農業用ならば26万円余と、用途により予算は異なる等具体的に書かれていたようです。農商務省は一郎平を中心とした農業用疎水を、一方主務官庁の内務省は舟を通す等が目的の少し大きな疎水であり、これに沿う予算は60万余でした。北垣は65万の予算を京都府議会と練り上げ、政府に提出したのですが、内務省での意見の違い等が絡まり着工許可がおりません。当時の内務省は《長州閘》《薩摩閘》《その他》に分かれていて互いに政府要人を背景に甲論乙駁、結論が出せない状況になっていました。

この時一郎平が内務省と協力して修正案を出し、120万のより完全な形で作るようにという【案】を、誰もが反対できない内容に組み替え、むしろ諦めた方がよいのでは？というようにしたのでした。しかし、北垣は《この案》を独断で受け入れたのです。この時の心境は『京都に持ち帰り議会を説得する。それが駄目なら知事辞任……』と、腹をくくっていたそうです。結果として京都府議会でこの案が承認され、これでこの計画は前に一歩進みます。

それほど一郎平の計画書は正確で、説得力に富んでいました。当初65万円とされていた琵琶湖疎水予算を、120万円余に修正したのも、一郎平で、これに基づき北垣は京都府議회를説得することになるのです。実際完成したときの費用総額が125万円余でしたから、如何に彼の計画が緻密で正確であったかの証左でしょう。

参考文献 琵琶湖疏水 S63.4 西岡良博 よもやまばなし琵琶湖疏水 2005.10 浅見素石

疎水を拓いた人々 1995.11.15 京都教育史サークル 琵琶湖疏水百年史 H14.4 京都市水道局
三大疎水と国家プロジェクト H21.9月 那須塩原市那須野ヶ原博物館